

陰陽の霊としての鬼神：朱子鬼神魂魄論への序章

柴田，篤

<https://doi.org/10.15017/2328503>

出版情報：哲學年報. 50, pp.71-91, 1991-03-30. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

陰陽の靈としての鬼神

——朱子鬼神魂魄論への序章——

柴田篤

一

古来、中国においては鬼神をめぐって様々な議論が展開されてきた。その存在の有無や対応の仕方に関しては、それぞれに違いが見られるが、一般に鬼神は、天神・地祇・人鬼を含んだ概念であり、祭祀儀礼に直接関わる問題であると共に、人間の死あるいは死後をどう捉えるかということに深く関わっていたといえる。従って、直接鬼神についての論究がみられない、あるいは少ないからといって、そういった問題に対して無関心であったとか、大して重要な意味を持っていなかったということは、一概には言えない。生と死に関して、また人間の認識能力を超えたことから対して、その人がどのように考えていたかを掘り下げてみる必要があるであろう。そのことは、それぞれの思想の全体像を探究するために看過することのできない課題であるといえる。今回取り上げる朱子の場合でも、その鬼神や魂魄に関する思索は、彼の間人観を考えるにあたってきわめて重要な意味を持っているのではないだろうか。

例えば、『朱子語類』一四〇巻中、冒頭の基礎理論編の構成は、巻一・二は「理気」、巻三は「鬼神」、巻四・五・

六は「性理」というようになっていく。この中、巻一・二を「世界観・存在論」、巻四・五・六を「人間観・人性論」と言うならば、巻三の鬼神は、その中間に位置しており、世界存在と人間存在の双方の問題に関わるものとして捉え

られているといえる。あるいは、世界と人間を包括する、結びつけるものとして鬼神がある、と見ることもできる。又、『語類』卷一四―九二に展開される経書解釈の中でも、鬼神に関する議論がしばしば登場している。このように『語類』の構成を一瞥しても、鬼神に関する問題が朱子の思想体系全般に深く関わるテーマであることがわかる。

ところで先に述べたように、そもそも鬼神という言葉には、様々な意味が含まれているといえるが、『朱子語類』巻首にある黄子毅「朱子語類門目」の「鬼神」の項では、次のように三つに大別している。すなわち、「天における鬼神」つまり陰陽の造化、「人における鬼神」つまり人が死んで鬼となるもの、「祭祀の鬼神」つまり天神・地祇・祖考である。¹⁾この分類からも、朱子の鬼神概念が、祭祀の対象となるものを指すと同時に、陰陽の造化という存在論の面と、死後の存在を含めた人間論の面という、両面から捉えられていることが窺われる。以上の点は、朱子の弟子の手になる『朱子語類』の構成分類上から見られることであるが、朱子自身の思想においても同様のことが指摘できるのではなからうか。本稿では、朱子の発言や著述に即して、特に人間存在における鬼神としての「魂魄」の概念を中心に考察していきたいと思う。なぜなら、朱子には性善説の基盤の上に、「心統性情」と「性即理」とを根幹とする緻密な人生論が構築されているが、鬼神論との関係については、従来の研究においても今一つ明確にされていない点があるように思われるからである。以下、朱子の人間理解における鬼神魂魄概念の位置付けをはかることによつて、彼の人間観や世界観を再検討する糸口を探ってみたいと思う。

なお、朱子の鬼神論に関する専論としては、友枝龍太郎氏の『朱子の思想形成』第二章「存在の問題」第三節「鬼神説」²⁾、三浦國雄氏の「朱子鬼神論の輪郭」³⁾、錢穆氏の『朱子新学案』第一冊「朱子論鬼神」⁴⁾等がある。諸論を参考にしながら、上記のような観点から考察を進めていくことにしたい。

二

先ず初めに、『論語』の「敬鬼神而遠之」（雍也篇）と「子不語怪力乱神」（述而篇）の語に対する朱子の註釈を見よう。

人道として為すべきことに専ら力を注いで、知ることのできない鬼神のことに惑わないのは、知者の事である。⁽⁵⁾

（論語集註・雍也篇）

怪異や勇力や悖乱の事は、正しい道理ではないから、もとより聖人が語ることはない。鬼神は造化の跡であり、正しくないわけではない。しかし、十分に理を窮めないならば、明らかにしにくいものがある。だから軽々しく人に語らなかつたのである。⁽⁶⁾（同上・述而篇）

このように朱子は、鬼神には不可知なる要素、明白にしがたい面があると説いている。また、『語類』卷三「鬼神」の冒頭で、次のように述べている。

鬼神のことは二番手にすることだ。あの影も形もないものは、理解しがたいものであり、理解する必要はない。先ずは日常の切実なことに努力すればよい。孔子が「十分に人に仕えることができているのに、どうして鬼神に仕えることができよう。人生のことが解っていないのに、どうして死後のことが解ろう。」（先進篇）と言っているが、ここに尽きる。つまり、理解すべきものが理解できれば、やがて鬼神のことは自然に解るのである。もし理解すべきものを理解せずに、ひたすら緊要でないものを理解しようとすれば、やがて何も解らなくなってしまう。⁽⁷⁾

また書簡の中で、次のように述べている。

鬼神の道理は、聖人でも説きたいものです。本当に一物が存在すると言うのは、もとよりよくないが、本当に一物が存在するのではないと言うのもよくない。もしはっきりと解らないなら、しばらく置いておくのがよいで

しょう。⁽⁸⁾ (朱子文集・卷五一・答董叔重)

ここで注意しておきたいことは、以下に見るように、朱子は鬼神の問題に関しても「窮理」の対象として分析解明を行なっているわけであるが、鬼神が理解しがたく、説きがたいものであるということにおいては、終始慎重な態度をとり続けたということである。このことは、必ずしも彼が鬼神の問題に対して優柔不断であつたということの意味するものではない。『論語』先進篇の孔子の言葉を用いていることから解るように、人と鬼神、人生と死後、つまり「知」と「不知」を明確に区別するという、孔子以来の考え方を継承するものといえる。従つて、「説きにくいものだから、暫く置いておく方がよい。」という言い方から、直ちに朱子が鬼神の問題を重視しなかつたとはいえないのである。むしろ、そういった言い方の背後にあるものに注目しなければならぬといえる。

さて、鬼神に関する朱子の概念定義は、『中庸章句』第一六章に見える。

程子は「鬼神は天地の功用、造化の跡である。」と云い、張子は「鬼神は二気の良能である。」と云っている。私
が思うに、二気という点から言えば、鬼は陰の靈であり、神は陽の靈である。一気という点から言えば、至りて
伸びるものは神であり、反りて帰るものは鬼である。その実、一物に他ならない。⁽⁹⁾

このように朱子は、程子や張子の説を承けながら、鬼神を陰陽二気の作用・現象として捉えている。『朱子語類』
に「鬼神は陰陽の消長に他ならない。」⁽¹⁰⁾ (卷三―六)とか、「鬼神は氣に他ならない。屈伸往来するものは氣である。」⁽¹¹⁾
(卷三―七)とかあるのは、そうした考え方を踏襲するものと言える。ただ『中庸章句』では、鬼神は陰陽の二気であ
るとストレートに言わず、「陰の靈」「陽の靈」と説いている点に注意しておきたい。明初の朱子学者である薛敬軒
(瑄)は、次のように言っている。

鬼神は二気の靈である。⁽¹²⁾ (読書統録・卷二)

鬼は屈であり、神は伸である。屈伸は陰陽の靈なるところである。⁽¹³⁾ (同上・卷一〇)

このように、薛敬軒は二気の霊として鬼神を捉えているが、更に次のようにも述べている。

鬼神は天地における陰陽の霊であり、魂魄は人身における陰陽の霊である。(同上・卷二二)

魂魄については、朱子自身、次のように言っている。

鬼神は天地の間の一氣に通じて言い、魂魄は人身を主として言う。(朱子文集・卷四四・答梁文叔)

先に述べたように、鬼神は様々な内容を含むが、魂魄は人間のみに適用されるものである。そもそも魂魄は、古来中国の人々が死と死後の問題を論ずる際に、しばしば登場する概念であり、文献によって内容表現に若干の違いも見られるが、概ね次のようなことが言えよう。⁽¹⁶⁾人は魂と魄が合わさった存在であり、死ぬと、魂と魄とが分離し、魂は天に昇り、魄は地に降る。魄は、形魄・体魄と言われるように、肉体的・形体的要素を持ち、魂は、魂氣・知氣と言われるように、精神的・理知的要素を担う。また、魄は鬼と、魂は神と、概念的に結びつく。陰陽で言えば、魂は陽で、魄は陰である。朱子は、こういった伝統的な解釈を踏まえながら、次のように述べている。⁽¹⁷⁾

人が生まれる時、魂と魄は交わりあい、死ねば離れてそれぞれ散去する。魂は陽であって上に散じ、魄は陰であって下に散ず。⁽¹⁸⁾(朱子語類・卷八七・祭義―5)

魄は形の神で、魂は氣の神である。魂魄は神と氣の精英であるから、霊というのである。だから、張子は「二氣の良能」と言ったのである。⁽¹⁹⁾(同上―6)

ここで朱子が「魄は形の神で、魂は氣の神である。」と言っているのは、『春秋左氏伝』昭公七年の孔穎達の正義に「形の霊なるものを名づけて魄という。」「氣の神なるものを名づけて魂という。」⁽²⁰⁾とあるのを踏まえたものといえる。遡れば、『淮南子』精神訓の高誘注に見える「魄は陰の神である。魂は陽の神である。」⁽²¹⁾という解釈に基づくものといえる。これは、『説文解字』第九上の「魂、陽氣也。」「魄、陰神也。」という説とも重なる。つまり、朱子の「鬼は陰の霊、神は陽の霊」という定義は、表現上は以上のような伝統的解釈を踏襲したものだといえる。そのことは、『語類』

の中で自ら高誘注を引いていることから解る（朱子語類・卷三―19）。しかし、だからといって朱子の鬼神解釈は単に伝統的鬼神観を踏まえただけのものと言えるかどうか。朱子は、程伊川の「鬼神は造化の跡である。」よりも、張横渠の「鬼神は二氣の良能である。」の方がよりの確な表現であると説いている（同上・卷六三・中庸一六章―19）が、それはなぜか。⁽²²⁾ 朱子自身が言うように、「二氣」の作用であることが「分明」に説かれていることにもよるが、先の引用からもわかるように、「二氣の良能」という表現こそ鬼神魂魄が「氣の精英」であり、「氣の靈」であるという性格を最も明確に言い表わしていると考えたからとも言える。つまり、「鬼は陰の靈、神は陽の靈」という定義には、やはり彼なりに特別な意味が込められていたと見るべきであろう。そのことを更に検討していきたい。

三

朱子は性と魂魄の関係について、次のように述べている。

性は理に他ならない。聚散するとは言えない。聚まると生じ、散じると死ぬものは、氣に他ならない。所謂精神魂魄で、知覚のあるものは、皆氣によるものである。だから、聚まれば有り、散ずれば無くなる。理となると、もともと聚散によつて有ったり無かつたりするものではない。∴（中略）∴鬼神は精神魂魄である。程子の云う

「天地の功用」、張子の云う「二氣の良能」は、いづれも性のことを言つたものでない。⁽²³⁾（朱子文集・卷四五・答廖子晦）

このように、氣の聚散によつて存滅する精神魂魄知覚と、聚散することのない理である性とは明確に区別されているのである。このような言い方を見るかぎりでは、人が死ぬと陰陽の氣は分散消滅し、魂魄も散滅してしまうことになる。だとすると、問題になるのは、宗廟の祭祀において祖靈が来格し、子孫がそれに感格することがあり得るかということである。鬼神を氣の姿として捉える時、祖靈の祭祀と矛盾しないかどうかということである。朱子は、この

問題に対して次のように答えている。

天地陰陽の気というものがあるだけで、人も万物もすべてこの気を受ける。気が聚まれば人となり、散ずれば鬼となる。しかし、その気が散じてしまっても、天地陰陽の理というものは生生として窮まることがない。祖考の精神魂魄は散じてしまっても、子孫の精神魂魄にはもとより連続したところがある。だから、祭祀の礼で誠敬を尽くせば、祖考の魂魄を招くことができる。このことは、もとより説き難いことだ。散じてしまうと、すっかり無くなってしまうかのように見える。誠敬を尽くすことができれば感格するというのは、理が常にしっかりと存在するからである。⁽²⁴⁾ (朱子語類・卷三—52)

このように朱子は、魂魄は気だから人が死ぬと散亡してしまふ、とは考えていないのである。そこに聚散することのない理が存在するからである。もう一度、『中庸章句』第一十六章に戻ってみよう。この章は、「夫微之顯、誠之不可掩如此夫。」という句で結ばれるが、朱子は「誠は眞実無妄のことである。陰陽の合散は、眞実でないものはない。」と解釈している。この場合、誠は「実理」の実と同義と考えてよい。陰陽の合散、つまり鬼神は実理に適ったことなのである。また、次のようにも述べている。

鬼神は氣を主として言つたもので、形而下のものに他ならない。ただ物に対して言えば、鬼神は氣を主として物の体となり、物は形を主として氣を待つて生ず。思うに、鬼神は氣の精英で、所謂「誠の掩うべからざる」ものである。誠は実である。鬼神は実有のもので、屈するのは実に屈し、伸びるのは実に伸びる。屈伸合散は、実で無いものはない。だから、このように掩うことができないほど昭昭と發現するのである。⁽²⁶⁾ (朱子語類・卷六三・

中庸一六章—5)

このように、「誠之不可掩」は鬼神が実有することを説いたもの、と解釈される。更に、次のように説いている。誠は実然の理であり、鬼神も実理に他ならない。もしこの理がなければ、鬼神も存在しない。⁽²⁷⁾ (同上—28)

以上のように見てくるならば、魂魄は二気が往来屈伸する作用であるが、そこには理が厳然と存在したのであり、その意味で鬼神は実理に他ならないとも言えるのである。朱子は次のように言っている。

「鬼神は二気の良能である。」(と、張子は述べているが)これは、(気の)往来屈伸は理の自然であり、作為按配するものではない、ということをお願いしたもので、だから「良能」と言ったのだ。(同上—18)

このように、二気の運動は聚散することのない理に支えられているのであり、その理の自然なる働きが「良能」と表現されている、というのである。とすると、前節で見たように、朱子は「良能」という言葉の中に「陰陽の靈」の意味を読み取っていたのであるから、鬼神は単に陰陽二氣の作用だけでなく、そこに理が存在するということを、「陰陽の靈」という言い方で表現しようとしたともいえる。ところで朱子は、鬼神禍福吉凶のことを徹底して理でもって捉えようとする意見に対して、「きみの言う通りだと、鬼神は存在しないことになる。鬼神は確かに理から説明するが、しかし、気が無いと言うことはできない。」⁽²⁹⁾と忠告している(朱子語類・卷八七・祭義—16)。理の面からだけで論ずるならば、鬼神の实在が説明できなくなるというのである。朱子はあくまでも氣と理を兼ね合わせたものとして鬼神を捉えていると言える。つまり、繰り返し言えば、「二氣の良能」「陰陽の靈」という鬼神の定義には、理氣の統合体としての鬼神の姿が説かれていたと考えられるのである。

ところで、理と氣の統合によって事物が成立するというのは、朱子の存在論における普遍的原理といえる。「天下には、理を離れた氣だけの存在もなければ、氣を離れた理だけの存在もない」⁽³⁰⁾(朱子語類・卷一—6)のであり、万物を造化する働きは陰陽五行であるが、理があつてこそ氣の働きがあるのである。

人や物が生ずる際、必ず理を得てこそ健順仁義礼智の性となり、必ず氣を得てこそ魂魄五臟百骸の身となるのである。周子の(『太極図説』に)所謂「無極の真、二五の精、妙合して凝る」⁽³¹⁾とは、正にこれを言ったものである。(大学或問)

理は存在の原理・規範であり、形而上の道であるから、「必ず理があつてこそ氣がある。」(同上)とされる。しかし、この理と氣の先後関係は極めて微妙なものがあると言える。朱子は、「理があつてこそ、氣があるのでしょうか。」という質問に答えて、次のように言っている。

これは本来、先後が言えるものではない。しかし、よつて来る所を推し究めようとすれば、先に理があると説かなければならない。しかし、理が別に一物としてあるわけではなく、氣の中に存在するのである。氣が無ければ、理は落ち着き所が無い。⁽³²⁾(朱子語類・卷一一一)

また、理先氣後の説に対する質問に、次のように答えている。

このように説くべきではない。直ちに理があつてこそ氣があるのか、理はあとで氣が先なのかを知ることは、どちらも推し究めることはできない。しかし、推測するに、恐らく氣は理によつて運行する。氣が集まるときには、理も存在する。思うに、氣は凝結造作することができるが、理の方は情意もなく、計度造作することもない。ただ、氣が凝聚するところには、理もその中にある。∴(中略)∴ただ氣があれば、理は必ずその中にある。(同上—13)

このように、理と氣の関係は、一概に先後を言うことができないものがあり、両者は混融しているといえる。朱子は『太極図説』の「無極之真、二五之精、妙合而凝。」の句を説明して、次のように言っている。

そもそも天下には性を離れて物は存在しないし、性が存在しないものはない。これが、無極と二五が隔てなく混融している理由である。所謂「妙合」というものである。⁽³⁴⁾「真」とは理から言ったもので、無妄のことである。「精」とは氣から言ったもので、不二のことである。(太極図説解)

以上のように、朱子の存在論における理氣の妙合という性格を考えてくるならば、次のことが言えるだろう。先に引いた『大学或問』に「必ず氣を得てこそ、魂魄五臟百骸の身となるのである。」とあつたように、魂魄は確かに陰

陽の二気によるものであるが、魂魄も実有のものである以上、理気の混融・妙合という性格を備えているのである。「二気の良能」「陰陽の靈」という表現で鬼神魂魄が捉えられた理由はここにあったのである。従って、朱子の鬼神魂魄に関する考え方を、単純に「気による解釈である」と捉えることには、やはり問題があるといえよう。⁽³⁶⁾

四

さて、次に考えるべきことは、魂魄の内容・作用である。前節で引用した中に、「所謂精神魂魄で、知覚のあるものは、皆気によるものである。」(朱子文集・卷四五・答廖子晦)とあったように、魂魄は知覚の働きを持つものとして捉えられている。「知覚」は、朱子学では心性論の範疇に属する概念であり、「心」が保有する重要な機能である。例えば、人心と道心を論じる場合にも、朱子は次のように言っている。

心の虚靈なる知覚は同一であるが、人心と道心の違いが生じるのは、形気の私より生じるものと、性命の正しきより生じるものがあり、知覚をなす根本が異なっているからである。⁽³⁶⁾ (中庸章句序)

朱子が知覚と言う場合には、身体的諸感覚の機能から条理規範の認識に至るまでを広く含むが、次のようにも述べている。

知覚されるものは理である。理は知覚を離れないし、知覚は理を離れない。⁽³⁷⁾ (朱子語類・卷五―24)

知覚されるものは心の理である。知覚することができるのは気の靈である。⁽³⁸⁾ (同上・卷五―26)

理は心が知覚認識する対象であるが、心と理は本来貫通するものである、と捉えられている。更に朱子は、心が理を知覚する働きを、「心の虚靈」あるいは「気の靈」と説いている。ここですぐに思い出されるのは、『大学章句』格物補伝中の次の言葉である。

思うに、人心の靈には、知が備わっていないものはないし、天下の事物には、理が備わっていないものはない。

ただ、理に関して十分に窮めていないところがある。だから知が窮められていないことがある。⁽³⁹⁾

このように、天下の事物が具有している理を究明し認識する作用は、心の靈妙なる働き（人心の靈）と見なされている。この場合、知覚する能力は何に依るのかが問題になる。朱子は、「知覚は心の靈妙な働きとして本来このようなのですか、それとも気の働きであるのですか。」という質問に答えて、次のように説いている。

気だけの働きによるものではなく、先ず知覚するという理があるのだ。理は知覚の働きはしないが、気が集まって形体をなし、理と気が合わさることによって、知覚することができるのだ。例えば、この燈が、油を得ることによって、盛んに燃え上がるようなものだ。⁽⁴⁰⁾（朱子語類・卷五—23）

心の靈妙な働きである知覚は、理と気が合わさることによって初めて可能なのである。朱子はまた、「心で思い、耳で聞き、目で見、手で持ち、足で踏むのは、気の及ばない所ようですが、気の働きには、これを主宰するものがあるのですか。」という問いに対して、「気の中には自らから靈なるものがそなわっているのだ。」と答えている（同上—37）。このように、知覚作用は理気の妙合によるものであるが、それは気の中において理が働くという靈妙性によるものであった。朱子は、「靈なるところは心ですか、それとも性ですか。」という問いに、「靈なるところは、心に他ならない。性ではない。性は理に他ならない。」⁽⁴²⁾と答えている（同上—22）。このように朱子においては、性は心に内在する理であって、靈なるものではない。「靈」とは万物の生成要素である氣に、存在原理たる天理が内在するという事実そのものを表した言葉だと言えよう。生成生存の根源に横たわる究極の事実であり、しかも、人間の認識や言語では推し窮めがたいものとして存在したのである。しかし、それはある固定的実体としてそこに存在するものではなかった。朱子は次のように語っている。

虚靈はもとより心の本体であり、自分で虚にすることができないのではない。耳で聴き目で視るが、視たり聴いたりする根源は、その心であるから、「心には」形象などあり得ようか。しかし、耳で聴き目で視るのだから、や

はり形象があるのだ。心の虚靈には、どうして一物などありえよう。(同上—38)⁽⁴³⁾

虚靈（靈）とは、心の本来の姿であつて、靈なる実体が別に存在するわけではない。話を元に戻せば、虚靈なる知覚こそ、心の本質（本体）をなすものといえる。朱子は、「心は性に比べれば、やや形跡があるが、氣に比べれば自ずから靈である。」(同上—40)⁽⁴⁴⁾と言っているが、心はそれ自体に理を保有するが故に、言い換えれば理と合一するが故に、事物の理を知覚認識する働きを持つのである。それが、「心の虚靈」「人心の靈」「氣の靈」と呼ばれるものである。

魂魄は、以上のような虚靈なる知覚を作用として持つ。だから、魂魄も知覚も共に、理と氣が妙合した「氣の靈」であると説かれるのである。魂魄は知覚機能を支える基体として存在するとも言える。しかし、魂魄と異なり、知覚は死後も存在するものではない。氣が散亡することによって、知覚作用は消滅するのである。知覚と魂魄は、生時における心の靈妙な作用という面と、死後を含めた氣の靈妙な働きという面の双方から、人間存在の最も根源的な要素について捉えたものといえよう。ではそのことは、朱子の人間観を見る上で、どのような意味を持つのであろうか。そのことを考える前に、鬼神祭祀の問題について触れておきたい。

五

第三節で引用したが、朱子は、死によって氣が散亡しても、祖考の魂魄と感格することは可能だと考えた。

祖考の精神魂魄は散じてしまつても、子孫の精神魂魄にはもとより連続したところがある。だから、祭祀の礼で誠敬を尽くせば、祖考の魂魄を招くことができる。このことは、もとより説き難いことだ。散じてしまうと、すっかり無くなつてしまつたかのように見える。誠敬を尽くすことができれば感格するというのは、理が常にしっかりと存在するからである。(朱子語類・三—52)

ここで重要なのは、子孫と祖考の魂魄との交感は、子孫が祭祀の礼において「誠敬を尽くす」ことによって始めて可能だということである。「誠敬を尽くす」とは、心を真実無妄なものにして、対象に対して純粋専一であるよう保持することである。『論語』（先進篇）の「未能事人、焉能事鬼。」に施された集註で、「誠敬によって人に仕えることができれば、決して鬼神に仕えることはできない。」⁽⁴⁵⁾とあるように、「誠敬を尽くす」ことは、他者に対していかに誠実であるかということである。言い換えれば、他者との関係において、自己の心をおくべきあり方（天理）に対して純一化することである。これは、朱子の功夫論で言えば、居敬の範疇に属するものといえる。「祭祀の礼で誠敬を尽くす」というのは、祖考を祀るという行為が自己の中で真実純粹なものとしておこなわれるということであり、祖考と自己の間における理の公共普遍性を確信し、これに従う姿勢のことである。つまり、祖考の魂魄との感格が成り立つためには、自他万物を貫く天理の实在と、その天理に対する誠実さが前提にされているといえる。『朱子語類』に、次のような問答が見える。

問う、「人が死ぬ時、魂魄は直ちに散じるのですか。」（答えて）言う、「もとより散じる。」また問う、「子孫が祭祀を行い、感格するのはなぜですか。」（答えて）言う、「結局、子孫は祖先の気である。祖先の気が散じて、彼の根はやはり確かに存在する。誠敬を尽くせば、彼の気をここに招き集めることができる。水の波と同様で、後の水は前の水ではなく、後の波は前の波ではないが、同じ水の波に他ならない。子孫の気と祖考の気もこれと同じだ。（死ぬと）その気は直ちに散じてしまうが、その根はやはり確かに存在する。根が存在する以上、その気をここに招き集めることができる。このことは説明しにくい。人が自分で理解しさえすればよいのだ。」⁽⁴⁶⁾（朱子語類・卷三―57）

ここで朱子が言っている「根」とは、聚散することのない理の存在を示唆したものといえる。このように、祖考の魂魄が来格し、子孫がこれに感格することができるのは、窮まることのない天地陰陽の理が魂魄の中に内在するから

である、と考えられているが、これは、祖霊の祭祀を根拠づける為にむりやり理の概念を持ち出してきたというものではない。既に見てきたように、鬼神魂魄は本来理気の妙合という性質を持つているのであるから、来格感格は、正にその理気妙合という魂魄の靈妙性が現れたものと見ることができよう。以上、祖考の魂魄との感格を説明した中で、朱子はいずれにおいても、「このことは説き難い。」と述べている。鬼神魂魄の持つ靈妙性、これが「陰陽の靈」と表現されたものに他ならなかった。このように見てくるならば、朱子は「説き難い」と言っている所にこそ、鬼神魂魄の本質を見ていたといえよう。そして、このことは、世界と人間に対する朱子の根本的な見方に関わっていたのではないだろうか。前節で見た、知覚と魂魄との関係に話を戻して、この問題を更に考えてみることにしたい。

六

朱子の考える学問の中心は、天理の窮明とその実現にあるといえる。『虚心順理』（心を虚明にして理に順う）、学ぶ者はこの四字を守らなければならない。⁽⁴⁷⁾（朱子語類・卷八―142）と言っているように、心を虚明にして、自らの行為が天理に合致するよう努めていくことが重要であると見なされた。理に順うためには、理を明らかにしなければならぬが、窮理（格物致知）の功夫は、常に居敬の功夫を必要とする。「主敬と窮理は両端であるが、実は本は一つである。」⁽⁴⁸⁾（朱子語類・卷九―20）、「学ぶ者の功夫は、居敬と窮理の二事にあるだけだ。この二事は互いに発し合う。窮理がうまくいけば、居敬の功夫も日々に益々進むし、居敬がうまくいけば、窮理の功夫も日々に益々密になる。」⁽⁴⁹⁾（同上―18）とあるように、居敬と窮理は、人の両足（同上）、車の両輪、鳥の両翼（同上―16）のようなものと見なされた。朱子は『大学或問』の中で、「敬の一字は聖学の終始を貫くものである。」⁽⁵⁰⁾として、程子の「主一無適」「整齐嚴肅」、謝上蔡の「常惺惺」、尹和靖の「其心収斂、不容一物」等の語を引用しながら、「敬は一心の主宰であり、万事の根本である。」⁽⁵¹⁾と定義づけている。敬はなぜ「一心の主宰」であるのか。朱子は『語類』の中で敬を説明して、「自

己の精神をしつかりと收拾する」こと（朱子語類・卷二二—69）、「身心を收斂して、整齊純一にし、放縱でないようにする」こと（同上・卷二二—74）、と述べている。「精神の收拾」、「身心の收斂」とは、形式面で我身を慎むと同時に、心を引き締めて天理に純一化することであり、朱子はまた「敬は『畏』の字に他ならない。」（同上・卷二二—99）とも言っている。敬は、単に塊然と兀坐するのではなく、畏謹^{つしむ}ところがあつて放縱にならないことである（同上・卷二二—97）。以上を要するに、敬は心を純一にし、天理に対して畏敬の姿勢を保持することであり、そのことによって、心は自ら主宰となり、天理は明らかになるというのである。ここで注意すべきことは、敬はただ心を收斂するのではなく、天理に対して畏敬の態度をとるということである。なぜそこに畏れの心が生じるのか。そもそも畏敬とは、どこか明白でないものに対して、にもかかわらず謹み従う態度を表わしたものといえる。つまり、天理を窮め明らかにしようとする主体（心）にとつて、天理そのものは本質的に未だ明らかならざる要素を持つものであった。そのことは窮理の実際面からも言えるのである。

『大学章句』格物補伝に、「人心の靈には知が備わっていないものはないし、天下の事物には理が備わっていないものはない。」とあるように、万物の理とそれに対する心の知覚を前提にして、格物致知は成り立っている。格物致知は具体的な事物に即して、その理を窮めることであり、その積み重ねの果てに、「一旦豁然貫通する」状態があり、そこにおいて、「衆物の表裏精粗にすべて到り、吾が心の全体大用がすっかり明らかになる」⁽⁵⁶⁾のである。格物致知の積累の結果として、豁然貫通なる状態が想定されているのではあるが、「一旦」の意味するものについては、それ以上明確に示されているとは言えない。つまり、個別的に実理の認識を積み重ねることと、豁然貫通という究極的な天理の体現とが、どのようにして結ばれるかということとは、言葉によつては説明できないものである。

以上のように考えるならば、心に内具する知の働きを窮める格物窮理の功夫においても、またそれを支える居敬の功夫においても、天理の持つ不可知なる性格というものが顔を覗かせていると言える。天理が明白なものであること、

また認識可能であるということは、あたかも自明のこのようではあるが、朱子はそれほど単純に理というものの性格を考えていたわけではないようである。言うまでもなく、朱子においては、性が心の中核に存在しており、「心と性はもとより区別がある。霊なるものは心であり、実なるものは性である。」⁵⁷⁾(朱子語類・卷16・大学・伝五章―1)というように、性として心に内在する理は、それ自体はあくまでも実なるものである。従って、理が不可知なる性格を持つとはいっても、それは実理としての実在性、安定性、権威性といったものを揺るがすものではない。朱子は、かかる実理の内在として、性を実なるものとして心の中に位置付けたのである。しかし、究極の所、理は人間の認識にとつて不可思議なる要素をもつ存在といえる。なぜなら、理は単独に理それ自体として存在するのではなく、現実の場において、つまり氣との「妙合」において現在するものだからである。理を認識する働きである知が、「心の霊」と呼ばれ、しかも天理にたいする「畏敬」感情が必要とされたのは、そのためといえる。

このように見てくると、知覚とその知覚作用を支えるものとしての魂魄の両者が、「氣の霊」として捉えられていることの意味がかなりはつきりしてきたといえる。生時において現実存在を認識把握する格物致知の働きと、死後における祭祀の対象ともなる魂魄(鬼神)の問題とは、幽明、知不知と、いかにも対極に位置するかのようではあるが、互いに密接に繋がらう関係にあると見ることができると、人はなぜ天理を「知る」(認識する)ことができるのか、これは理氣の妙合としての「心」の本質に関わる問題であり、存在そのものの持つ不可知性にまで行き着かざるをえない。天理が単に「所当然の則」だけでなく、「所以然の故」つまり存在の究極的意味をも含むものであったこととも重なる。そのことは、裏返せば、魂魄―死生を貫く人間存在の持つ不可思議性、あるいは鬼神といわれるものの持つ不可説性とも繋がるのである。⁵⁸⁾

従来、朱子の鬼神論は、往々にして陰陽二氣による鬼神解釈と見なされ、その故に宗廟の祭祀に関しては矛盾を来すを免れず、言い逃れを行なっている、と説かれることも多かつた。つまり、朱子の氣による鬼神論は論理的破綻を来しており、祭祀の問題に至つて、朱子の合理主義的鬼神解釈は後退を余儀なくされている、というものである。しかし、本稿において試みてきたように、陰陽の靈という表現、すなわち理氣の妙合としての鬼神魂魄という考え方に注目して見ていくならば、少なくとも朱子自身の思想体系においては、論理的矛盾や破綻を招来するという言い方だけでは片付かないものがあつたと言える。むしろ、陰陽の靈という鬼神の性格を考えていく時、朱子の思想の根底にある、人間及び存在そのものに対する根本的な思惟を捉えなおすことができるのではないだろうか。

朱子の鬼神魂魄論を考察するに当たつて、今回は魂魄の面、また特に陰陽の靈という点に絞つて検討してきた。朱子の鬼神論の全体像、及びその倫理説との関係等については触れなかつた。また、宋代の先行する思想家や同時代の人々の鬼神観とどのような関係が見られるのか。更に、朱子の鬼神魂魄観はその後いかなる道をたどることになつたか。こういった問題に関しては、また別の機会にその検討を譲ることとしたい。

【註】

(1) 其別有三。在天之鬼神、陰陽造化是也。在人之鬼神、人死爲鬼是也。祭祀之鬼神、神示、祖考是也。三者雖異、其所以爲鬼神者則同。知其異、又知其同、斯可以語鬼神之道矣。故合爲一卷。

(2) 友枝龍太郎著『朱子の思想形成』(改訂版)(一九七九年、春秋社刊)。

(3) 『神觀念の比較文化論的研究』(一九八一年、講談社刊)所収。また、「朱子鬼神論補」(一九八五年、大阪市立大学『人文研究』

第三七卷所収)も参照。

- (4) 錢穆著『朱子新學案』(一九七一年、三民書局刊)。その他、張立文著『朱熹思想研究』(一九八一年、中国社会科学出版社刊)第六章、「形神、魂魄、鬼神學說」等も参照。
- (5) 專用力於人道之所宜、而不惑於鬼神之不可知、知者之事也。
- (6) 怪異勇力悖亂之事、非理之正、固聖人所不語。鬼神造化之迹、雖非不正、然非窮理之至、有未易明者。故亦不輕以語人也。
- (7) 鬼神事自是第二著。那箇無形影、是雖理會底、未消去理會、且就日用緊切處做工夫。子曰、未能事人、焉能事鬼。未知生、焉知死。此說盡了。此便是合理會底理會得、將間鬼神自有見處。若合理會底不理會、只管去理會沒緊要底、將間都沒理會了。
- (8) 鬼神之理、聖人蓋難言之。謂真有一物、固不可。謂非真有一物、亦不可。若未能曉然見得、且闕之可也。
- (9) 程子曰、鬼神天地之功用而造化之迹也。張子曰、鬼神者二氣之良能也。愚謂、以一氣言、則鬼者陰之靈也、神者陽之靈也。以一氣言、則至而伸者為神、反而歸者為鬼。其其一物而已。
- (10) 鬼神不過陰陽消長而已。
- (11) 鬼神只是氣。屈伸往來者、氣也。
- (12) 鬼神是二氣之靈。
- (13) 鬼者屈也。神者伸也。屈伸是陰陽之靈處。
- (14) 鬼神者、天地陰陽之靈。魂魄者、人身陰陽之靈。
- (15) 鬼神、通天地間一氣而言。魂魄、主於人身而言。
- (16) 『札記』郊特牲篇に「魂氣歸于天、形魄歸于地。」、禮運篇に「体魄則降、知氣在天。」、祭義篇に「氣也者、神之盛也。魄也者、鬼之盛也。……」、「春秋左氏伝』昭公七年の伝に「人生始化曰魄、既生魄、陽曰魂。」等とあるによる。
- (17) 魂と魄それぞれの作用に關する朱子の見解については、前掲三浦論文に詳しい考証があるので、参照。
- (18) 人生時魂魄相交、死則離而各散去、魂為陽而散上、魄為陰而降下。
- (19) 魄者、形之神、魂者、氣之神。魂魄是神氣之精英、謂之靈。故張子曰、二氣之良能。
- (20) 形之靈者、名之曰魄。：氣之神者、名之曰魂。
- (21) 魄、陰之神。魂、陽之神。
- (22) 伊川謂鬼神者造化之跡、却不如橫渠所謂二氣之良能。：張子之說、分明便見有箇陰陽在。
- (23) 性只是理。不可以聚散言。其聚而生、散而死者、氣而已矣。所謂精神魂魄、有知有覺者、皆氣之所為也。故聚則有、散則無。若

- 理則初不為聚散而有無也。：鬼神便是精神魂魄。程子所謂天地之功用、造化之迹、張子所謂二氣之良能、皆非性之謂也。
- (24) 只是這箇天地陰陽之氣、人与萬物皆得之。氣聚則為人、散則為鬼。然其氣雖已散、這箇天地陰陽之理生生而不窮。祖考之精神魂魄雖已散、而子孫之精神魂魄自有些小相屬。故祭祀之礼尺其誠敬、便可以致得祖考之魂魄。這箇自是難說。看既散後、一似都無了。能尽其誠敬、便有感格、亦緣是理常只在這裏也。
- (25) 誠者真実無妄之謂。陰陽之合散、無非実者。
- (26) 鬼神主乎氣而言、只是形而下者。但对物而言、則鬼神主乎氣、為物之體。物主乎形、待氣而生。蓋鬼神是氣之精英、所謂誠之不可掩者。誠、実也。言鬼神是実有者、屈是実屈、伸是実伸。屈伸合散、無非実者、故其發見昭昭不可掩如此。
- (27) 誠是突然之理、鬼神亦只是実理。若無這理、則便無鬼神。
- (28) 鬼神者、二氣之良能、是說往來屈伸乃理之自然、非有安排布置。故曰良能也。
- (29) 如子所論、是无鬼神也。鬼神固是以理言、然亦不可謂無氣。
- (30) 天下未有無理之氣、亦未有無氣之理。
- (31) 人物之生、必得是理、然後有以為健順仁義礼智之性。必得是氣、然後有以為魂魄五臟百骸之身。周子所謂無極之真、二五之精、妙合而凝者、正謂是也。
- (32) 或問、必有是理、然後有是氣、如何。曰、此本無先後之可言。然必欲推其所從來、則須說先有是理。然理又非別為一物、即存乎是氣之中。無是氣、則是理亦無掛搭處。
- (33) 或問先有理後有氣之說。曰、不消如此說。而今知得他合下是先有理、後有氣邪、後有理、先有氣邪、皆不可得而推究。然以意度之、則疑此氣是依傍這理行。及此氣之聚、則理亦在焉。蓋氣則能凝結造作、理却無情意、無計度、無造作。只此氣凝聚處、理便在其中。：但有此氣、則理便在其中。
- (34) 夫天下無性外之物、而性無不在。此無極二五之所以混融而無間者也。所謂妙合者也。真以理言、無妄之謂也。精以氣言、不二之名也。
- (35) 崎門の佐藤直方は、朱子の鬼神に関する言葉を集めて、『鬼神集説』を刊行しているが、『中庸鬼神大意』（『韞藏録』巻四）の中で、鬼神を論じるには、「理ヲ主トシテ云」と、「氣ヲ主トシテ云」の双方が必要であることを強調している。また、この文の中で、「朱子ノ靈ノ字ヲ云ハレタ所ニ眼ヲツクベシ」「朱子ノ靈ノ字ヲ云ハレタルハ扱々味アルコトナリ」と、特に朱子の「陰の靈」「陽の靈」という表現に注目している。慧眼というべきであろう。

- (36) 心之虛靈知覺一而已矣、而以為有人道心之異者、則以其或生於形氣之私、或原於性命之正、而所以為知覺者不同。
- (37) 所知覺者是理。理不離知覺、知覺不離理。
- (38) 所覺者、心之理也、能覺者、氣之靈也。
- (39) 蓋人心之靈、莫不有知、而天下之物、莫不有理。惟於理有未窮。故其知有不盡也。
- (40) 問、知覺是心之靈固如此、抑氣之為邪。曰、不專是氣、是先有知覺之理。理未知覺、氣聚成形、理與氣合、便能知覺。譬如這燭火、是因得這脂膏、便有許多光焰。
- (41) 心之所思、耳之所聽、目之所視、手之持、足之履、似非氣之所能到。氣之所運、必有以主之者。曰、氣中自有箇靈底物事。
- (42) 問、靈処是心、抑是性。曰、靈処只是心、不是性。性只是理。
- (43) 虛靈自是心之本体、非我所能虛也。耳目之視聽、所以視聽者即其心也。豈有形象。然有耳目以視聽之、則猶有形象也。若心之虛靈、何嘗有物。
- (44) 心比性、則微有迹。比氣、則自然又靈。
- (45) 非誠敬足以事人、則必不能事神。
- (46) 問、人之死也、不知魂魄便散否。曰、固是散。又問、子孫祭祀、却有感格者、如何。曰、畢竟子孫是祖先之氣。他氣雖散、他根却在這裏。盡其誠敬、則亦能呼召得他氣聚在此。如水波樣、後水非前水、後波非前波、然却通只是一水波。子孫之氣與祖考之氣、亦是如此。他那箇當下自散了、然他根却在這裏。根既在此、又却能引聚得他那氣在此。此事難說、只要人自看得。
- (47) 虛心順理、學者當守此四字。
- (48) 主敬窮理雖二端、其美一本。
- (49) 學者工夫、唯在居敬。窮理二事。此二事互相發。能窮理、則居敬工夫日益進。能居敬、則窮理工夫日益密。譬如人之兩足、左足行、則右足止、右足行、則左足止。
- (50) 敬之一字、聖學之所以成始而成終者也。
- (51) 敬者一心之主宰而萬事之本根也。
- (52) 如今看聖賢千言萬語、大事小事、莫不本於敬。收拾得自家精神在此、方看得道理尽。
- (53) 然敬有甚物。只如畏字相似。不是塊然兀坐、耳無聞、目無見、全不省事之謂。只收拾身心、整齊純一、不恣地放縱、便是敬。
- (54) 敬、只是一箇畏字。

(55) 敬非是塊然兀坐、耳無所聞、目無所見、心無所思、面後謂之敬。只是有所畏謹、不敢放縱。

(56) 至於用力之久、而一旦豁然貫通焉、則衆物之表裏精粗無不到、而吾心之全体大用無不明矣。

(57) 心与性、自有分別。靈底是心、実底是性。

(58) 友枝龍太郎氏は、前掲著の結語の中で、「先祖の祭祀感格をとおして生命の根源に触れることは、居敬脱然貫通の方法の祭祀における表現と見ることができる。してみれば祭祀感格の神秘性の残留は、理で詰める朱子の窮理の立場を補うものであったと言えるであろう。：(中略)：居敬脱然貫通妙契悟入は、鬼神説における祭祀感格の神秘性と相連なることになる。：(中略)：鬼神を氣のはたらきとし、氣の聚散生滅によつてこれを理智的に理解することは鬼神をあくまで対象化して把握することであり、またこれを氣の根に絞つてみたところで、やはりそこにはそういう気や鬼神の対象化が残る。こういう対象化の方向を完全に主体化するのが祭祀の感格ではなかつたろうか。生命の根源は知的に理解することもできようが、やはり窮極においては、我々が敬畏を存して直接それに触れることによつてはじめて可能であると思われる。鬼神説における祭祀の感格が、朱子の鬼神解釈の鮮明さにもかかわらず、神秘性を残していたとすれば、太極説・格物致知説にも、やはりいくらか神秘性を残していたと考えなくてはならぬのである。妙契悟入・豁然貫通という表現がこのことを明示している。」と述べている(二二八四頁)。「神秘性」という表現については考慮すべき点があるように思われるが、示唆を受けることの大きい論説であつた。